

北九州市の文化財を守る会

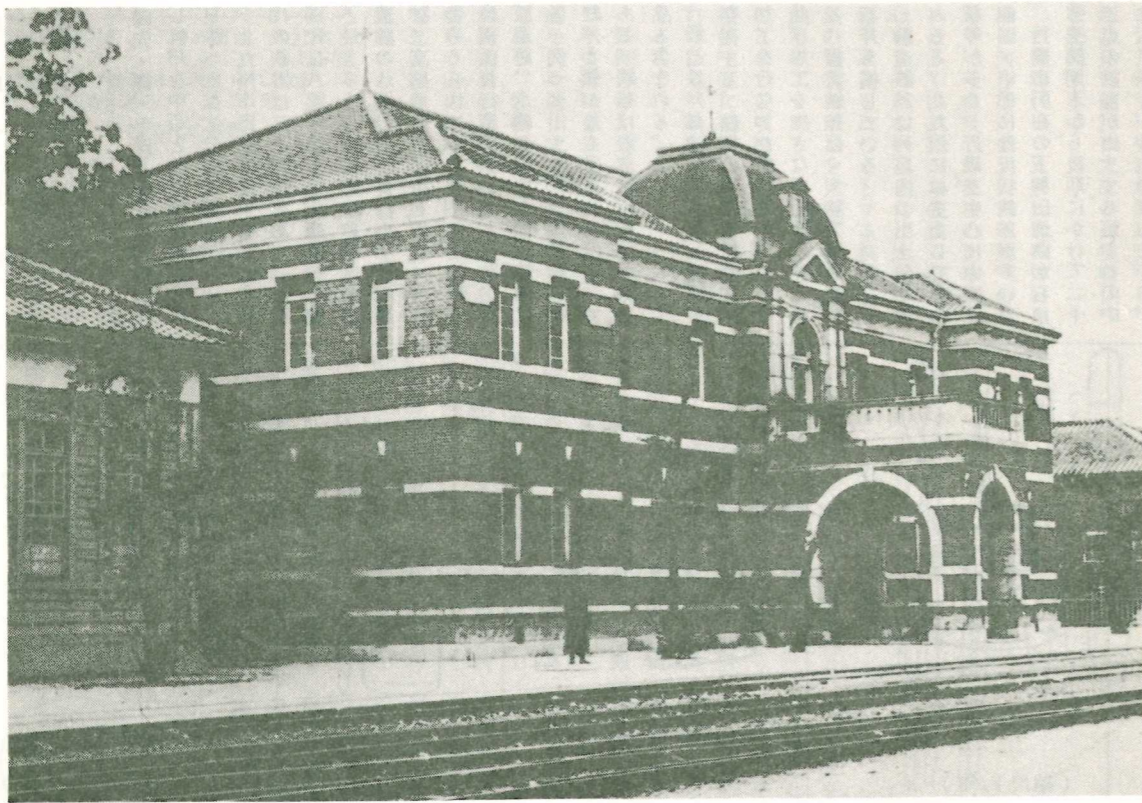
会報

№ 52 60・8・1

発行 北九州市の文化財を守る会

北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7-2
森 鷗 外 旧 居 内
電話 (093) 531-1604

印刷 博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2-22
電話 (093) 511-1011



明治34年創業当初の八幡製鉄本事務所

明治二十九年三月二十九日の「製鉄所官制公布」に続いて翌三十年二月六日「製鉄所ハ福岡県下筑前国八幡村ニ之ヲ置ク」と告示された。当初の計画を大巾に増加した追加予算が第十二回帝國議會で承認を得るや直ちに年内工事に着手し、明治三十四年二月五日、第一熔鉱炉に火入、全年十一月十八日に作業開始式を、そしてこの日を起業記念日と定めて毎年起業祭を行うこととなった。

伊藤博文を囲んだ東田第一熔鉱炉前の記念写真は最も著名。見ればまだ足場が組まれてあり明治三十三年建設中の姿をよく示す。

高炉と併行して着行された「旧本事務所」の赤レンガ造りはさながら女王の如く優雅な気品を放つ。上掲の写真は全三十四年創業当初の艶姿なのである。

北九州における明治の赤レンガ建築は、門司港にも見受けられるが、国鉄の合理化の前に煙滅しつつある。「九州鉄道茶屋町橋梁」は昭和五十年、市の指定文化財に指定を受けた。曾て京都で同志社のキャンパスに一日を遊んだ時、殆んどの校舎が重文級の赤レンガ建築であること。チャペルも、神学館も、図書館も文化財である事を意識せずに日常茶飯の中に使われてある事にさすがは千年の古都ならではと嘆ずるものを感じた次第。

八幡製鉄所の「赤レンガ」は、そっくり同志社のキャンパスに移しても、決して見劣りしないわれらの女王であるが、永い間企業の壁に閉ち込められて忘れられている存在である。この建築を製鉄所の文書館にする等の風聞もあるにはあった。今これを書いている六月二十日の朝日新聞は、新日鉄は設備技術本部を八幡から転出せしめると報じた。急がねばならぬ。「女王」を守るためにも。

(平木)

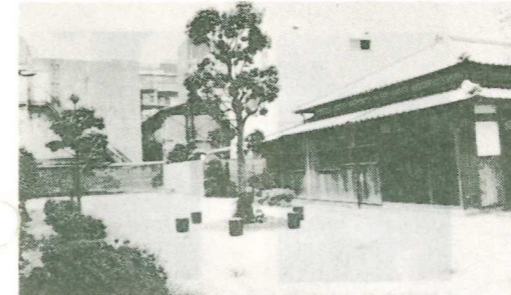
状の段があり、内部に灼跡や桂穴などは無く、東壁のほぼ中央部床面近くから珪光質製のスクレーパーなどが出土しました。

貯蔵穴は直径約80cmの円形で深さ約1mのほぼ円筒状をしており、内部から碧玉製の石核、黒曜石製の剥片、敲石などが出土しました。土壌はA1号V縦1m10a、横70cm、深さ42cmの長楕円形で剥片、砕片が出土した。A2号V縦1.6m10a、横70cm、深さ40cmの長楕円形で剥片、砕片が出土した。A3号V縦1.3m、横55cm、深さ25cmの楕円形で彫器の石屑が出土した。A4号V縦1.5m、横60cm、深さ20cmの楕円形で碧玉製のナイフ形石器が出土した。A5号V縦1.3m10a、横75cm、深さ15cmの楕円形で黒曜石の剥片、砕片が出土した。A6号V縦4.5m、横1.2m、深さ40cmの不整形で黒曜石製の彫器が出土した。

その他乞食層からナイフ形石器、石核、錐などが出土した。

おわりに

後期旧石器時代(先土器時代)の竪穴住居は、日本ではまだ数例しか発見されておらず、(鹿児島県上場遺跡・長野県駒形遺跡など)それらの時期もナイフ形石器文化より後出する尖頭器、細石器文化に属し、椎木山遺跡第2地点の2軒の竪穴住居(ナイフ形石器文化に属す)より新しいと考えられる。



森鷗外庭園

市教育委員会は、史跡環境保全のため買収した市指定史跡・森鷗外旧居の東側隣接地(約三百二十平方メートル)を、この程度庭園として完成させました。

シラカシの木を取り囲むように

これら竪穴住居、土壌は埋め戻し現地保存が決定しましたが残念ながら貯蔵穴は壊され無くなってしまっています。

(北九州市埋蔵文化財調査室勤務)

森鷗外旧居
隣接地の庭園完成

市教育委員会は、史跡環境保全のため買収した市指定史跡・森鷗外旧居の東側隣接地(約三百二十平方メートル)を、この程度庭園として完成させました。



書齋

スツールを置き、周辺にアベリヤツツジ、ヤブツバキ、サザンカ、アジサイを配したシンプルな庭園となっています。

旧居は五十七年三月の復元公開以来これまで三万八千余人が入館しました。見学者は地元市民はもとより、最近では全国各地から観光研究者も多数訪れています。

明治の雰囲気を感じたい旧居が、この庭園をもったことで、また一層の詩情を湧かせることでしょう。

(庭園の方も旧居と同じく次のとおりです)

開館時間 午前九時三十分〜午後四時三十分

休館日 月曜日・国民の祝日

入館料 無料



展示コーナー

火野葦平資料室の開設

七月一日に開館した若松市民会館の中に、若松の生んだ作家・火野葦平の遺品や資料を収蔵展示する資料室が開設されました。

葦平は本名玉井勝則、明治四十年、父玉井金五郎、母マンの長男として生れました。十三才で早くも文学を志し、昭和十三年、三十才の時、「糞尿譚」で芥川賞を受賞、つづいて「麦と兵隊」、「土と兵隊」、「花と兵隊」の兵隊三部作を発表、のちこの作品が朝日新聞文化賞、福岡日々新聞文化賞に輝きました。

終戦後、再び旺盛な文筆活動を続け、「花と龍」、「革命前後」

など数多くの作品を発表しましたが、三十五年一月二十四日、河伯洞の書齋で自ら命を断ちました。その年の三月「革命前後」と、生前の業績に対し芸術院賞が贈られました。

資料室は河伯洞の書齋の復元と展示コーナーに分かれています。所蔵資料は原稿、書簡、書籍など約一万点に及びますが、展示点数は約二千点です。この中には「創作ノート」「日記」「従軍手帳」などが含まれています。これら資料は葦平文学を研究するうえに必見のものであります。

開館時間 午前十時〜午後四時

休館日 月曜日・国民の祝日

入館料 無料

編集後記

▼暑中御見舞申しあげます。この夏を事故なく、お元気に越されんことをお祈りいたします。

▼会報第五十二号は、八幡東支部の担当で、とくに平木支部長のご尽力によるものです。猛暑のなかお疲れでした。次号は若松支部にお願いいたします。

▼事務局も旧居に移ってから三年になりました。庭園も広々と整備されたので、お気軽にお立ち寄りください。

(保)

北部九州の古代製鉄(その一)

大澤 正 己

はじめに

鉄は、私達の生活にとって欠く事のない重要な物質の一つである。しかし、鉄器は錆やすく、製鉄遺構の多くは、焼け土と木炭鉄滓程度の出土で、文化遺物の検出は少なく、過去の考古学の世界では、鉄の研究を「つかみどころのない分野」などと、ささやかれていた。

だが昨今では地道な研究が重ねられ、着実な成果も上げられていく。今回それらの成果の一部を、北部九州の地域のなから抽出し、鉄の歴史として概略述べてみる。

一、弥生時代の鉄器と鍛冶

先土器(縄文時代)と長く石器の使用された時代に替って、稲作農耕と金属器を伴った弥生文化が、大陸から朝鮮半島經由で伝播してくる。この弥生時代から石器が駆逐され、鉄器が普及されてゆくのである。

弥生時代の前期では、石器主体でまだ鉄器の量も少なく、小型品の鉄斧や鉞(やりがんな)である。弥生中期になると、矛・矛・剣といった武器が現われて大型化する。弥生後期では、量が増大し、板状鉄斧が数点含まれている。

鋤先・鎌・手鎌らの農具が鉄器化し九州を中心とした西日本から東日本へと拡大分布される。

北九州市内から出土した弥生時代の鉄器は三十七例である。遺跡別には八幡西区馬場山遺跡が十例と最も多く、続いて小倉南区郷屋遺跡の八例、同区長行小学校内遺跡、高島遺跡、蒲生石棺群(大興善寺うら山)の各五例、これに小倉南区長行遺跡、上徳力遺跡、宮原遺跡、八幡西区黒ヶ畑遺跡らに各一例づつ出土する。器種別には、鉄斧と鉞が最も多く各八例づつである。鉄斧は鍛造品が多いが、鋤先も含まれる。

鍛造鉄斧は、大別して二種類が存在する。鉄板の両端の折りまげ加工を行なった袋状鉄斧に対して、曲げ加工を施さない板状鉄斧である。板状鉄斧は、大陸系扁平磨石斧を模している。

鍛造鉄斧は列島内の出土分布をみると、北九州には主として袋状鉄斧が多く、近畿を中心に中国、四国・中部には板状鉄斧が多い。行橋市所在の下稗田遺跡からは弥生前期末から後期にかけて二十三点の鉄器が出土するが、この中に板状鉄斧が数点含まれている。

をこうむり、生活基盤は安定し、階級化が進行して次の古墳時代へと発展する。

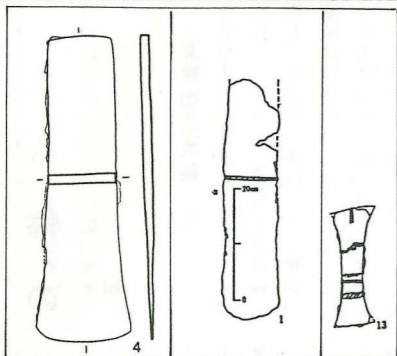
古墳時代は、五世紀代の偉容を誇る前方後円墳(巨大古墳)の造築や、その後の群集墳の土木工事には多くの鉄製工具の投入なしには考えられない。また、大量の武器や武具をはじめとする鉄器副葬品の豊富さは目を見張らせるものがある。

これら古墳副葬品の中には、直接鉄生産に結びつく遺物も検出されている。鉄鋌、鍛冶具、鉄滓ら

鉄鋌とは、長方形を呈する鉄板で中央部にくびれをもたせ、両端部を折り返してもって形態を整えている。性格は、はっきりしないが鉄素材の可能性が高い。西日本からの出土が多く畿内を中心として五世紀の古墳から多く出土し、一部古いものは弥生末(四世紀)の住居跡から検出される。

福岡県では短冊形鉄斧に近い鉄鋌が宗像市久原瀬ヶ下遺跡から、小倉市三沢花登二

居跡から出土している。この具下の二本の鉄鋌の金属学的調査を行なっているが、これらは鉱石を原料

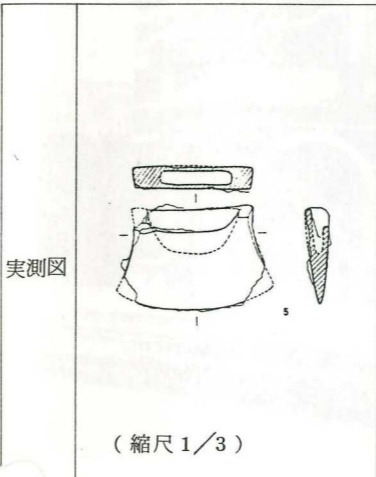
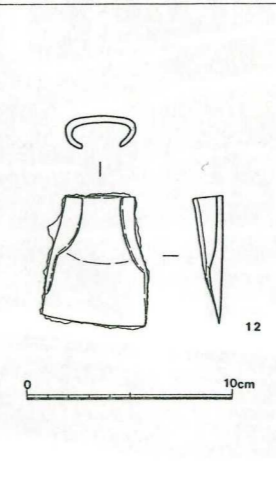
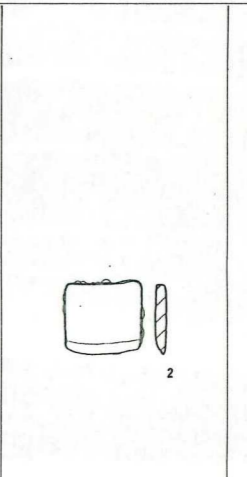
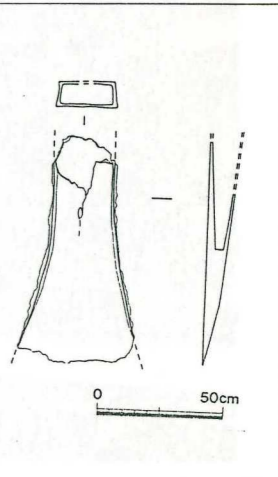


小倉市花登2号墳 沖ノ島 大分県古墳山下

鉄鋌は鍛造品で鉄素材と考えられるが一部では貨幣説もある。

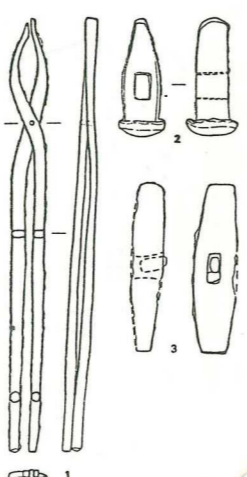
図2 古墳時代の鉄鋌

小倉市三沢花登二居跡から出土している。この具下の二本の鉄鋌の金属学的調査を行なっているが、これらは鉱石を原料



地名	小倉区 高島	八幡西区 黒ヶ畑	行橋市 下稗田	小倉南区 長行
時期	弥生時代 終末期	中期後半～末期	前期末～中期中葉	前期～中期(縄文晩期の可能性あり)
製法	鑄造品	袋状鉄斧：鍛造品	板状鉄斧：鍛造品	鍛造品の可能性大
産地	大陸産	素材は大陸産 鍛冶加工は国内産		大陸産
原料	非金属介在物からチタン(Ti)分が検出されず砂鉄系ではなく、鉱石を原料とする素材から製造されている。			

図1. 北部九州出土の弥生時代鉄器



1.2 甘木市池ノ上6号墳出土
3 春日市門田2号墳出土
鉄鋌(やっこ) 鉄鋌

図3. 古墳時代の鍛冶工具

とする素材で大陸からの舶載品と推定される。(図2参照)

鍛冶具。直接鍛冶作業に用いられたもので被葬者との関わりが想定される。被葬者は技術者とは限らず鍛冶集団を統括した首長の場合も考えられる。鍛冶具は、鉄鋌、鉄鋸、タガネ、鉄床らである。(図3参照) 全国で三十数例あり、福岡県下八例で、卑近な例では、宗像市山ノ口遺跡の鉄鋌と鉄鋸がある。

古墳供献鉄滓は、西日本を中心に百五十三例が判明している。九州では八十四例知られ、このうち福岡県は七十九例と他地域の群を抜く。鉄滓は、横穴式石室採用の場合には羨道部から玄室入口にかけてが多く、他には周溝や墳丘外にも供献する。(図四参照)、この鉄滓は、明らかに製鉄に結びついた被葬者、もしくは製鉄集団の存在を想起される。また古墳周辺には鍛冶工房か製鉄跡があったことが想定される。

化学組成を調査すると、六世紀中頃を境にして、古い方では鍛冶製錬滓となっており、それ以降になると砂鉄製錬滓となっており、製錬遺構が六世紀後半から七世紀前半のものしか検出されていない現状では、列島内の製錬開始時期を考察する上において、古墳供献鉄滓の存在意義は重要である。

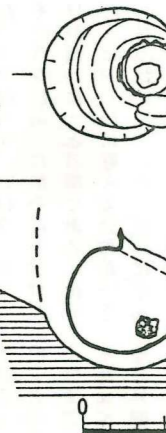
以上の様に、古墳時代の鉄生産の実態は、まだ不鮮明である。六世紀後半以降より、福岡平野においては大量の製鉄が操業されたことは、出土鉄滓から証明される。製鉄跡の調査は今一歩である。福岡市西区コノリ池遺跡、同新池遺跡らが調査されているが、報告書が未刊のため詳細は不明である。四十四・一九八四・六・十四。

栗山伸司「北九州市内の弥生時代鉄器」『古文化研究会会報No. 44』一九八四・六・十四。

抽稿「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会 一九八三

抽稿「考古遺物に対する金属学的調査手法について」『埋蔵文化財研究会第十六回研究会発表要旨』一九八四・八、熊本

抽稿「下稗田遺跡出土の弥生時代鉄器に対する金属学的調査」『下稗田遺跡』行橋市教育委員会 一九八五



宗像市浦谷古墳群H-4号

鉄滓は鍛冶滓であった。

図4. 古墳供献鉄滓

八幡の地名

前山利治

大蔵川と大蔵

私が大蔵川を初めて見たのは、昭和十六年夏国民学校入学前年の事...

この大蔵川を地質学的に見れば、中世紀・白亜紀の粘板岩・砂岩で形成され、大蔵より上流になると...

取って説明をしている。遠賀郡誌上巻に、岫門とは狭き所に水を通ずる所をいう、水茎の岡の漢という...

しい処が数多く、谷川にも倉沢と...

かいてガケや岩場が多い、岩の断崖を、岫・岫(クラ)と書くこともあり...

あつて、大師堂が建っているとの事であったが、私はこう考えている...

博多平野が一番狭くなった場所に築かれた水城。その後方は太宰府側に大きくふくらんでいるし、...

八幡市史にも高槻村所在の因幡忠慶の墓、監物の墓の紹介があるが、小笠原の一門に連る彼ら及び...

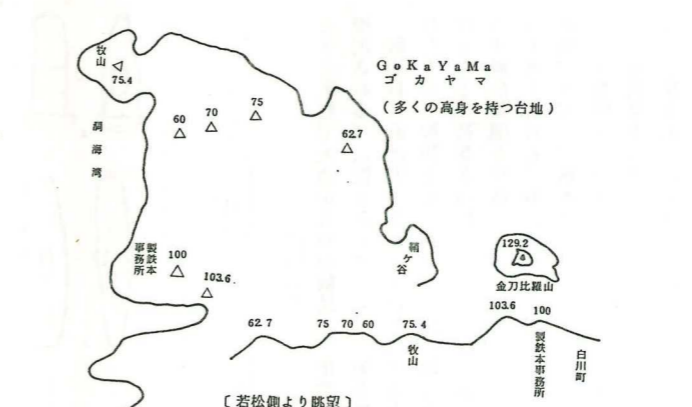
高槻・荒生田の地区は、豊前から切離して、八幡市へ合併されたものであるが故に、八幡からも小倉からも忘れられたと思う。...

信州の名族・小笠原 小倉郷土会の「記録十六号」に「信州時代の小笠原」について詳述された米津三郎氏は去六月、...

とはいえおもしろい事をしたものである。ただその一端は下流に岩淵という地名で知ることが出来るだけである。

枝光

柴田重利氏(枝光在任)談で若松の古老から聞いた事であるが、ゴカヤマイヌコウジという所があつて、...

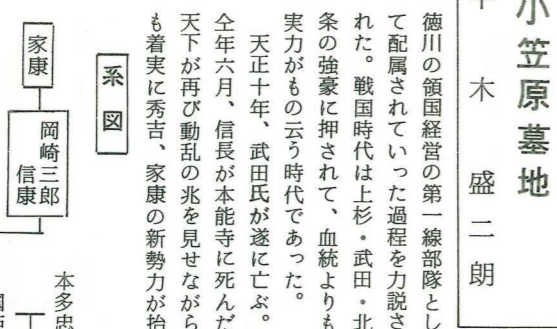


た。ゴウは不明、ジは寺である。その昔寺があつたが今は大師堂だけが残った」との事である。「地元の人とは同じ様に呼んでいたか」との私の問いに「いや、地元になんと呼び方は無い」との返事が帰つて来た。...

血倉山 血倉山の倉は、大蔵の所で説明した様に「崖」で国見岩から西にそつて(北面)断崖になっている。...

頭しつつあ。かゝる混乱の隙をうけて小笠原貞慶は深志の故地を遷し流浪の生涯を清算した。...

岡崎三郎の姪たち 龜姫は、岡崎三郎信康の二女國姫の娘に当る。國姫は本多美濃守忠政に嫁して龜姫を生んだ。...



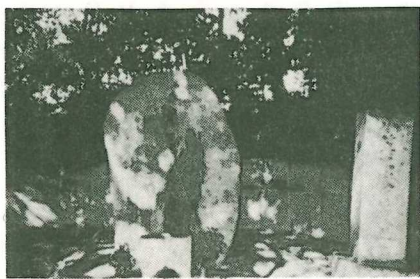
系図 信長 徳姫 信康 信長 重直 忠直 忠真 忠信 忠増 長直 長宣 長安 長広 長武 長隆 長道 長海

大路広十七丈、隍広八尺南垣半三尺、犬行五尺、溝広四尺、隍溝間十二丈等の「犬」である。犬行(イヌユキ・犬走の古名)今は、築地の外壁と溝との間の狭長な空地をいう。...

慶長元年二月古河城に生れた。三男忠知は、のち杵築四万石城主、四男長門(重直)は、のち丹後守養子、竜王三万七千石の城主となった。五男因幡忠慶は、慶長七年、六男長俊も慶長十二年、飯田城内で生れた。この長俊が有明な大里の静泰院である。

岡崎三郎信康は悲劇の人物であるが、その室は徳姫、信長の娘である。永禄二年の生れ、寛永十三年正月卒。彼女は信康の死後、上京し、上鳥丸に御屋敷を構へ、家康より知行三千石を賜り岡崎峰と呼ばれ、七十才の高令で死ぬまで乱世を高雅に生きぬいた女である。法名は、見屋院香殿寿桂である。

S 系図の秘密
因幡忠慶が五歳のとき、母福姫は病死。父の秀政は頭をそって隠



因幡忠慶の墓(中央自然石)旧高槻村所在

居した。そして忠慶は出家させられ吞菊と改め、ゆくゆくは峯高寺住職にすえられて、母の菩提を弔うべき運命づけられていたが、秀政と長兄忠愷の戦死から、吞菊の周辺は変化を始める。忠真が宗家を襲う。忠真と円照院の婚姻。明石城へ移封。吞菊にも確実な風が当り初め、出家を嫌って明石に移り、築城中の忠真の許しを得て還俗。喜三郎を名乗った。

知行千石。小倉転封後は、采地七千石の士大将として、寛永十五年二月島原へと出陣した。帰陣後まもなく流人を命ぜられ、企救郡高槻村に隠棲。食禄現米三百。忠雄公は百石を与へ、延宝三年七月十四才の高令で高槻で死んだ。

延宝三年歳次乙卯
雲門院殿法印定新大居士之碑
十二月廿八日

因幡忠慶の長男は長武、主殿と号した。元禄元年十一月病により蟄居。三十人扶持を与へらる。正徳元年高槻で死んだ。

正徳元辛卯年
玄照院無端了徹居士
七月初三日

因幡忠慶の二男・隆範は幼名を菊千代・長成と号す。真言宗の僧となり大和国吉野・桜本坊の住持であったが、のち坊を辞して高槻

村に帰る。享保十六年七十七才、高槻で死んだ。

享保十六辛亥年
素光院権大僧都法印隆範和上之塔
八月十九日

因幡忠慶の三男・重長と号す。忠雄公の時、御家門・中老の格に列し斎宮家を興す。元禄元年采地千四百五十石を賜う。宝永六年五十二才で死んでいる。高槻村で。

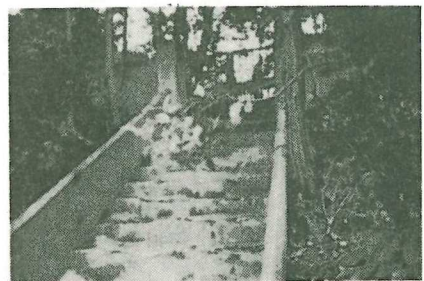
宝永六己丑年
圓明院殿寂山智照居士
九月初三日卒

因幡忠慶の四男、智徳院道達は初名長賀・数学。元禄五壬申年八月、求菩提山座主となる。

智徳院権大僧都法印と号し、元禄十五壬午年四月廿三日卒。四十三才。墓は求菩提山紅葉谷にある。

因幡忠慶の五男、台教院道海は童名金六郎。宝永五戊子年正月、求菩提山座主となる。台教院権大僧都法印、正徳四甲午年八月廿九日卒。四十九才。墓は求菩提山紅葉谷にある。

忠増は忠雄の弟。忠真の五人目の男子。家臣坂牧兵右衛門正俊の養子となり坂牧監物と号し、二千石を継いだが寛文五年故有って蟄居、食禄五十人扶持を賜り、貞享五年高槻村に死んだ。七十三才。坂牧家は断絶となる。



高槻村(現在槻田・宮ノ町一丁目)の小笠原墓地

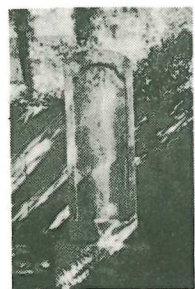
貞享五戊辰春
捐館本堂院殿源忠正日大居士神儀
二月初三日

坂牧監物の長男・佐助は早世。監物の二男長鎮は幼名坂牧虎之助と称し、長じて小笠原監物長教と号し、新規に家を興した。寛文十二年新知千五百石、中老・家門に列す。正徳三年卒。六十三才。

正徳三癸巳年
高濟院義寛正恩居士之楯
十月初六日

監物長教の二男、貴長は幼名勝藏、源之助と称したが二十六才で早世した。宝永五年卒。

宝永五戊子年
大玄院真鑑正光居士
十一月十五日



素光院権大僧都法印隆範和上



小笠原主殿長武(玄照院)

のため藩主権力を高めると云う至上の命題の故に、「有故蟄居」。「依病蟄居」或は老臣坂牧家の断絶等を生んだ反面、新に中老の家を創出する。斎宮家・監物家がそれに該当する。尚因幡忠慶の四男、道達。五男・道海は求菩提山に送り込まれ、座主として修験の山を支配した。

正保享期に集中して見た無血・行財政・税制改革の故に、延宝の治が約束せられたと思う。僅かな食禄で高槻村に隠棲した藩主の弟達は皆天寿を全うし、希れなる高令で死んだ。

秀政父子が戦死し、忠真まで九死に一生を得た大坂の陣の相手は旧小倉城主・毛利勝永であった。寛永九年の移封は勝永の城・小倉城であったから、いささか因縁め



小笠原斎宮重長(圓明院殿)



監物父子の墓(谷口霊園に所在)



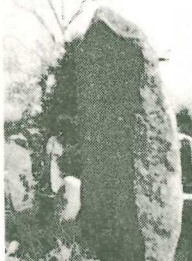
小笠原貴長(大玄院)(谷口霊園にあり)



小笠原監物長教(高濟院)(谷口霊園にあり)

いた話になる。

この戦いで戦死するもの三十人創をかうぶる者二十五人の死闘であったが、敵首四十七級を得た獲首高名の勇士も多かった。その中に、伊藤市郎兵衛の三男・市兵衛の名も含まれている。伊藤市兵衛はのち因幡忠慶の御小姓頭として島原にも参陣、忠慶の隠棲と共に高槻に土着、宝永六年柳瀬の姓を賜る。忠慶一族の墓を守って今日に至る子孫の方も健在であることを記しておく。



坂牧監物(谷口霊園にあり)

椎木山遺跡について

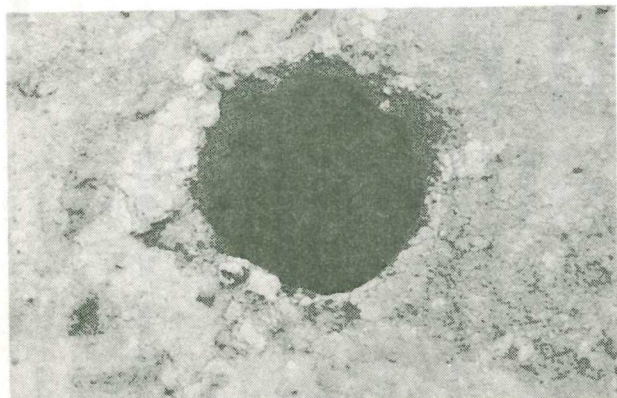
上村 佳典

椎木山遺跡第2地点は、標高16m、25mの遠賀川の低位段丘上に立地し、洞海湾の最奥部と遠賀川のほぼ中間地点(若松区大字蟹住一七三二一他)に所在します。本遺跡は福岡身体障害者職業訓練校建設に伴い、昭和59年度試掘(一部発掘)調査を実施し、中世から近世にかけての土壌群を検出しました。これら土壌群の内部には焼土や炭化物に混在し、少量の陶磁器が出土しました。約10年前発掘調査を行った椎木山遺跡(東側隣接地)の火葬墓群の有り方や立地状況から、この第2地点の土壌群を一種の墓群と推定していますが、人骨の出土が無く断定するには至っていません。

さて問題の後期旧石器時代(先土器時代)の遺構・遺物ですが、これらは中・近世の下層、明黄褐色粘質土層(第3層)と赤褐色土層(第4層)にあり、第3層を取り除くと第4層に掘り込んでつく



2号住居跡 左上が入口



貯蔵穴(7号土壌)

られていました。遺構は住居跡2軒、貯蔵穴1基、土壌が6基あり、その他焼土面(炬跡)が数ヶ所確認出来ました。住居跡は1号、縦6.5m、横3.5m、深さ20cmの隅丸長方形か楕円形をした平面形で柱穴(径20~25cm、深さ10~20cm)が4本、土壌(縦50cm、横40cm、深さ30cmの不整形円形)が1基あり、北側隅に焼土(炬跡?)と炭化物がありま

す。この住居跡床面や土壌内から石英製のスクレーパーや珪岩質製の剥片などが出土しました。1号、縦4m、横2.4m、深さ25~30cmの変形五角形(将棋の駒の形)で北東端に入口と考えられる階段